

「はつきり言つて 国は当てるにならぬ」 「台風」市長のまるごと構造改革

● 栃木市長
日向野義幸 (ひがの・よしゆき)

蔵の街、栃木市。

江戸時代、日光東照宮の造営をきっかけに街を流れる巴波川の舟運が栄え、物資の集散の地として、また日光幣幣使街道の宿場町として栄えたまち。今なお四百以上残る蔵の数々が、往時の歴史を偲ばせる。この栃木市が、福祉行政の在り方を一八〇度転換させるシステムを作り上げ、注目を集めている。さまざまな壁を乗り越えて行った、人を中心とした福祉サービスへの転換は、さらに縦割り行政に代わる新しい自治体の有り様への模索、そして市民と共に作り上げる「まちづくり」へとつながっている。人口八万三千の中規模の自治体のまちぐるみの改革を日向野義幸市長に聞く。



日向野 義幸 ひがの・よしゆき
栃木市長。1958年(昭和33)栃木市生まれ。
79年日本大学短期大学部卒業後、栃木市議会議員(3期)、栃木県議会議員を経て、
2003年4月より現職。

人間らしさを回復する
サポート行政始動!

水頭症など重い障害をもつた
め人工呼吸器を常時着けていな
いと生きられない少年がいた。
両親はわが子と家庭で一緒に暮
らす日を夢見てその可能性を探

ってきたが、叶えられなかった。

誕生から七年あまり経ったとき、
不可能だと思われたその願いが
突如叶えられた。今年四月にス

タートした栃木市の「福祉ト
ータルサポートセンター(以下、
トータルサポートセンター)」
が在宅ケア支援に乗り出したか

らだ。

この少年のご両親は、「念願
の親子三人暮らしが叶った」と
言って、本当に喜んでおられま
してね。特にお母さんは、地域
の中で息子の存在を認めてもら
いたいという願いをもっておら

れたんです。社会の中で多くの
人とふれあって暮らせるといっ

ご両親が市にご相談に見えた
後、トータルサポートセンター
の職員が診療、看護、介護、教
育といった各関係機関に連絡を
取り、一堂に会して、この子の